

体操競技のジュニア育成に関する研究 クラブ員の保護者および指導者の意識を中心にして

錦井利臣*・木村正治*
中川保敬*・坂下玲子*

A Study of the Gymnastic Athlete Development System in Kyushu from the idea of the participants' parents and instructors

Toshiomi NISHIKII, Masaharu KIMURA,
Yasutaka NAKAGAWA and Reiko SAKASHITA

(Received October 2, 1991)

We had discussed the problems of junior gymnastics club in Kyushu by analyzing the participants' ideas in the last paper (Nishikii, *et al.* 1990). This study also investigated the same theme in detail from the viewpoint of the members' parents and instructors. The results were as follows: 1) The participants whose parents had in high estimation the junior gymnastics club activity and expected high level games had a strong will to accomplish their purposes. The parents were worried that the playing in junior gymnastics club was not always compatible with school work. 2) There were many cases in which the participants were often forbidden to enter for the games of junior high and senior high school organizations. This disturbed the continuous athlete exercise from elementary school to high school. 3) The analysis of the instructors opinions made clear the shortage of participants and the weakness of social and financial status as an instructor of junior gymnastics club. 4) If the club could have many instructors, participants could be distinguished according to the strength of will to accomplish their purposes, producing the satisfactory results.

緒 言

体操競技界における、選手層の若年化は、体操競技を始める年齢の引き下げに拍車をかけている¹⁾²⁾。このことは社会教育領域であるスポーツクラブでのジュニア期からの一貫した選手の育成、強化の重要性や必要性の状況を作り出している。

九州でも、昭和61年より、体操競技ジュニア選手の育成の普及や技術の向上のため「九州小学生体操競技大会」が開催されてきた。

年ごとに各県選手の競技力の向上がみられるものの、チームの構成メンバーが同一小学校の所属ではないこと、および社会体育に属するジュニア体操の

各クラブ間の技術面を中心に著しい格差が存在することなどの問題点も指摘される³⁾。

著者らは、平成元年11月より、九州各県のジュニア体操クラブの所属部員、保護者および代表指導者を対象にアンケート調査を行った。

クラブ員の入部動機や継続意識については、すでに熊本大学教育学部紀要第39号において報告した⁴⁾。

その中で下記の4点

1. ジュニア体操クラブに所属するメンバーは、他の単一種目のスポーツクラブに較べ、著しく少なかった。

2. 体操を始める動機は「鉄棒・マット・とび箱が得意」、「オリンピック選手になりたい」など積極的な動機を持つ者が、それぞれ26.1%、25.5%にみられた。一方、非積極的ととれる者や、動機のはつ

* 保健体育科

きりしない者もみられ、これらの者に対しては、充分な教育的配慮のもとで、より積極的な動機づけが必要であると考えられた。

3. 新しい技に挑戦する時の態度や場面では、クラブ員の技術段階で「新しい技」に対するとらえ方のちがいはあるものの、指導者の適切なアドバイスと、補助が大きな役割を果たしている事が指摘された。そのため指導者は、平素から選手や保護者とも、その関わりの中で、相互理解や信頼関係も保つよう心がけることが肝要である。

4. 体操競技を、大学・社会人になっても続けたいとした者は、大会上位選手群では80%にみられたが、その他の者は33.6%であった。しかし、進級、進学の関係から、今後、学校側とスポーツクラブ側の話し合いに基づく、相互理解や連帯が必要であると考えられた。

が明らかにされた。

今回、先のアンケートよりさらに深くジュニア体操クラブの実態や問題点を把握し、今後のジュニア育成に向けての検討課題を明らかにするため、体操クラブ員の保護者の意識、指導者側の抱える問題点について検討を加え報告する。

対象および方法

第4回九州小学生体操競技大会（1989、大分市、以下九州大会と省略）に参加したクラブを中心とした九州各県の15団体に所属するクラブ員（小学1年生から6年生）とその保護者およびクラブ代表指導者を対象に、質問紙法によるアンケート調査を実施した。

調査期間は1989年11月から翌年3月までである。

調査内容は、各クラブ員に対して、体操競技を始めた動機、生活の中での体操競技の位置づけ、試合に対する態度等である。

保護者に対しては、練習参加状況、生活の変化、試合や練習に対する保護者の意識などである。さらに、クラブ代表者には活動に伴う問題点について調査を行った。

結 果

調査の結果、15クラブ、162名のクラブ員とその保護者およびクラブ代表指導者の質問紙が回収された。なお、各クラブの事情もあり、回収率については問題としなかった。

調査の対象となったクラブ員162名中、九州大会参加者は48名（29.6%）、その内25名（25.1%）の者

が、大会上位選手であった。

練習日数は週あたり、最少2日で最多7日であった。1日の練習時間は平均2.3時間である。経験年数は平均2.6年で経験年数の長い者に九州大会参加者が多かったが、入部1カ月未満の者から、9年間継続している者も見られ著しい幅があった。

保護者は、子どもが体操競技を始める事の賛否について、153名（93.8%）が賛成している。また、入部後の日常生活における性格の変化については、「根気強くなった」57名（35.2%）、「明るく活弁になった」47名（29.0%）とし、次に、「度胸が良くなった」、「礼儀正しくなった」等を認めている。

体操競技をすることに心配な点または不満な点がありますかという質問に対し、自由記述式解答では、無解答以外、「けがの心配」、「成長期の激しい運動が身体に及ぼす影響」や「学業との両立の困難さ」などがみられた。

体操競技の位置づけについて、「小学校の間だけの楽しみ」、「たいくつしのぎ」の項はそれぞれ3.9%、6.5%と非常に少なく、「これから先の学生生活において情熱を注ぎいれるもの」60名（39.2%）、「今の生活を最も楽しくしているもの」55名（35.9%）、さらに「将来の職業も体操関係でと望むほど重要なもの」とした者も14.4%にみられた。

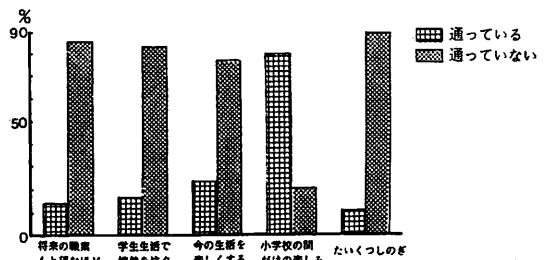


図1 体操の位置づけと学習塾

図1は、体操競技の位置づけと学習塾に通っている・いないについて表したものである。

学習塾に通っている者は31名（20.3%）であったが、体操競技の位置づけとの関係では「小学校の間だけの楽しみ」としている者の80%が学習塾に通っており、その割合が著しく高いことが認められた。

図2は、期待する試合レベルと体操以外の習い事の回数を示したものである。

保護者は、「子どもが将来どんな試合レベルに出場する事を期待しているか」について67名（41.4%）

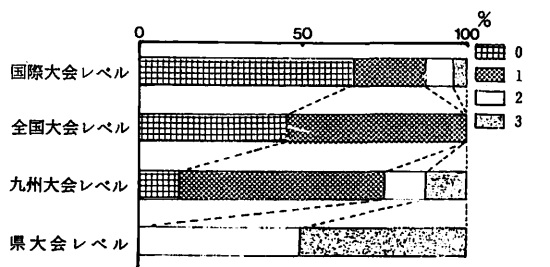


図2 期待する試合レベルと習い事の回数

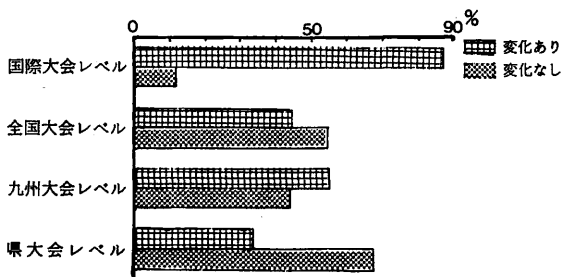


図3 期待する試合レベルと生活リズムの変化

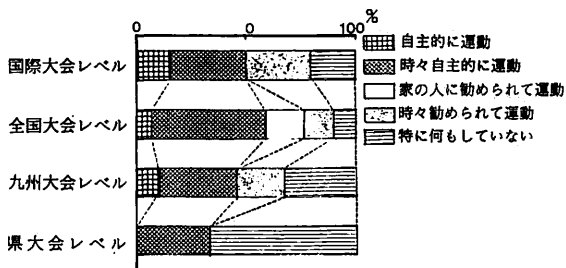


図4 期待する試合レベルと自主練習

の者が不明としている。しかし、全日本選手権や国民体育大会などの全国レベルの試合に参加を期待する者が29名(17.9%)に、オリンピックや国際大会レベルの試合に参加させたいとする者が24名(14.8%)にみられた。習い事の回数との関係では、解答者のうち47%が「習い事には通っていない」としている。期待する試合レベルが高い者ほど、習い事の回数は少ないことが示唆された。

図3は、保護者の期待する試合レベルと生活リズムの変化との関係を示したものである。全体で87名(54.4%)の者が生活リズムの変化があったとしている。国際大会レベルなど、目標を高く持っているこどもは、保護者からみて21名(87.5%)の者が生活レベルの変化がみられる様子が伺えた。

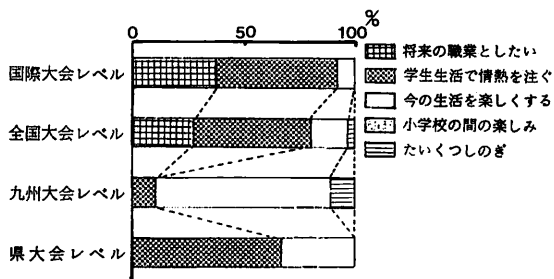


図5 期待する試合レベルと体操の位置づけ

表1 指導者の考えるクラブの現状

	問題	やや問題	やや満足	満足
部員数	6	4	3	2
施設・設備	3	6	3	3
立地条件	1	2	4	6
指導者数	3	7	2	3
人間関係	1	0	7	6
雰囲気	0	1	7	6
技術的指導	1	6	5	2
精神面の指導	0	6	8	1
体力トレーニング	1	6	7	1
体重コントロール	3	4	6	0
クラブ員の所属				
学校との関係	3	2	6	2

図4は、クラブが休みの時の自主練習の実施状況を期待する試合レベル別に示したものである。

期待する試合レベルが高い者ほど、何らかの形で運動をしている者が多く、技術の向上や精神面でも意欲的であることが伺える。

図5は、保護者の期待する試合レベルの解答を体操の位置づけとクロス集計したものである。

期待する試合レベルが高い者ほど「将来の職業も体操関係でと望むほど重要な者」、「これから先の学生生活で情熱を注ぎ入れるもの」とした者が多数を占めた。この2項目の体操の位置づけでオリンピックや国際大会レベルへの出場を期待を持つ者はそれぞれ37.5%、54.2%であった。全国大会レベルに期待を寄せている者も27.6%、51.7%にみられた。一方、九州大会レベルおよび県大会レベルを期待する者では「今の生活を最も楽しくするもの」とした者がそれぞれ77.8%・33.3%にみられた。さらに、「小学校の間だけの楽しみ」とした者は、期待する試合

レベルも低かったり、なかった者が多かった。

表1は、代表指導者の答えたクラブの現状に対する解答をそれぞれの項目について分類した結果を示したものである。

「雰囲気」や「人間関係」では「やや満足」および「満足」とした指導者が、共に13クラブ(86.7%)にみられた。しかし、部員数、指導者数では66.6%の者が、施設・設備については60.0%の者が「問題」および「やや問題」とする結果であった。

考 察

今回対象となった体操クラブの事情は種々違っているものの、体操クラブの目的として、有望な選手を育成し、九州のみならず全国大会規模の試合に照準を合わせ、活動しているものと考えられる。そのため、指導者は技術面の高度化に伴い、指導技術も専門的知識と指導テクニックが要求されている。ジュニア選手の修練には、将来を見越した一貫したトレーニング計画と段階的、系統的な練習を行うことが必須である。新しい技への挑戦の際には、常に未知への空間動作への恐怖心が伴うものであるため、指導者は適切なアドバイスと信頼のおける補助テクニックを兼ね備えていることが要求される。しかし、活動しているクラブ員の入部動機と考え合わせると、「鉄棒、マット、とび箱が得意」、「オリンピック選手になりたい」など、積極的な動機を持つ者がいる一方、「家の人からすすめられたから」、「友達、兄弟がやっているから」など非積極的な動機の者もそれぞれ37.3%、28.0%にみられた。つまり、体操競技を行う上での技能差はもちろんのこと、入部する段階での意識の差は決して高レベルの者だけではない。広く逸材を発掘するという面から当然な結果ともいえるが、専門的な技術向上をめざすねらいからすると活動開始の時点での動機にも問題点が指摘できよう。

保護者は子どもが体操の練習を始めることについてほとんどのもの(153名、93.8%)が賛成しているものの「心配な点、不満な点はありますか」という質問に対し、自由記述式の解答では、「けがの心配」、「成長期の激しい運動が身体に及ぼす影響」や「学業との両立の困難さ」などの記載がみられた。保護者は子どもの遠い将来を見つめ、スポーツ参加による効果を期待し、奨励しているものの、常に傷害や学業成績については「心配事」として抱えている様子が伺える。

保護者が子供の活動を注意深く観察しているなか

で、体操の位置づけについて「これから先の学生生活において情熱を注ぎ入れるもの」、「今の生活を最も楽しくしているもの」とそれぞれ39.2%、35.9%、さらに「将来の職業も体操関係でと望むほど重要なもの」が14.4%にみられた。このことは、子ども自身が体操を好意的に受けとめ、練習にも意欲的に参加していることなどから、設問に多少の曖昧さが残るものの、子どもが体操の練習を行っていくことに対し、保護者の理解の深さが伺える。

保護者の考えた体操の位置づけと期待する試合レベルの関係でも、期待する試合レベルが高いものほど「将来の職業も体操関係でと望むほど重要なもの」と考え、子どもの持つ強い達成意欲による影響が働いているといえる。

体操の位置づけと学習塾との関係や、期待する試合レベルと習い事の回数の関係から、体操の位置づけや、期待する試合レベルが高い者ほど、子どもたちの持つ体操に対する達成意欲や意見が、保護者に強く反映しており、学習塾や習い事に通う頻度も少なくなっている。それだけに、子どもやその保護者は、うまくなりたい、なってほしいと願っているものと考えられる。

体操の位置づけを「小学校の間だけの楽しみ」、期待する試合レベルを「県大会レベル」としたものは、保護者が子どもの適性を見抜いているのか、あるいはそれで良いとしているのかは判らないが、学習塾や習い事に通う比率は高い。保護者の体操に関する期待や意識も薄く、子どもの発揮する達成意欲も低いのではないかと考えられる。

このことは、スポーツクラブに通うことを一連の学習塾や習い事と同じレベルで考えられており趣味または、しつけ教育の一つとしてとらえられているのではないかと考えられた。この様に、子どもたちの持つ達成意欲の強弱にはかなりの違いがあることが指摘される。

ジュニア選手層の底辺拡大の為のメンバー増強と、高レベル選手の育成強化というふたつの目標を達成していくためには、クラブ員とその保護者および指導者の十分な話し合いに基づき、その時の意識や技能レベルに応じた個々のグループを編成し、週あたりの練習頻度や、練習時間を設定することが必要であろう。この場合、週あたりの練習日数の制限や指導者不足の影響を受けることが予想されるが、その過程で可能な限りの練習成果をねらうことが肝要であると考えられる。

入部後の日常生活における性格の変化については

「根気強くなった」、「明るくなった」がそれぞれ35.2%、29.0%、つぎに「度胸が良くなった」、「礼儀正しくなった」と精神的にもプラス面に性格が変化しことが確認された。

体操を開始したことによる学校の成績への影響については、成績が悪くなったとした者が3名と少なく、逆に成績が良くなったとした者が21名にみられた。どちらともいえないとした者は128名(79.0%)で圧倒的に多く、体操を始めたことによって直接学業の成績に影響があるとはいえない。

期待する試合レベルと生活リズムの変化に関して、オリンピックや国際大会レベルなど、目標を高く持っている子どもは、体操に重点を置く生活リズムに移行する傾向を示していた。その内容を求めたところ、「学校から帰ったらすぐに宿題をするようになった」、「学校や練習の準備を自分からするようになった」という反面、「夕食がおそくなった」、「疲れが残り朝の早起きができなくなった」等の記載もみられた。このように、すべてについて好影響を与えているとはいえないものの、スポーツクラブに参加することによる直接効果や、スポーツ練習による教育効果があることが指摘されよう。

また、生活リズムや生活の変化にともない、クラブが休みの時の自主練習の実施状況を、期待する試合レベル別にみると、期待する試合レベルが高いものほど、何らかの形で運動しているものが多く、技術の向上や精神面でも意欲的であることが伺えた。しかし、全体の38.9%の者が「特に何もしていない」としている。練習日の多いクラブでは、普段の練習でも補える面もあると思われるが、適度の自主練習の実施は、コンディショニングや意欲持続のため重要な方策として心がけるべきであると考えられる。

クラブ員の練習への参加状況は、「ほとんど休まず参加している」と答えた者は65%である。しかし、このことは、各クラブの活動状況が、週2日～7日の幅があり、いちがいに評価できない。週6、7日の練習は、技術的な向上は期待できるものの、選手の身体的な負担や保護者の負担が大きくなる可能性が高く、また指導者もその負担が大きくなるという一面も考えられる⁵⁾。また、練習場までの交通手段において、送り迎えのため家族の協力を必要としている者も46.9%にみられた。このことは、保護者にとっても生活の変化を余儀なくされ、その負担は少なくない。しかし、このような生活リズムの変化もクラブ員だけでなく、家族ぐるみで体操の魅力を理解しようとする協力的態度の現れであると思われる。

日本のスポーツ史は学校スポーツから始まり、近年まですべて学校スポーツがその舞台であり、今なお90%以上は学校スポーツに依存しており、このことは体操競技のみならず、陸上競技に限っていえば100%といっても過言でないと指摘される⁶⁾。

一部には、学校やクラブの名誉と宣伝のため、各種スポーツにおいて推薦入学や特別待遇制度を持ち、競技力の優秀な人材を求めていることも現状である。指導者はそのため選手を求められる技能水準まで高める必要に迫られ、年齢や個人差を考慮にいれた一貫したトレーニングを無視せざるを得なくなり、短期間の内に強化している状況も問題といえる。

また、保護者の抱える「心配事」の一つに「けがの心配」があげられた。

クラブ員の練習中の傷害については、男子30名(46.9%)、女子41名(42.3%)の者が傷害の経験をしており、男子がわずかに多い。指導者はクラブ員の傷害の予防については最大限の注意を払っていると考えられる。しかし、傷害が発生してしまった場合、指導者のほとんどが中学校・高等学校の教諭が担当する学校クラブ活動と一緒に近くの小学生を指導している状態であることから、傷害に対する責任や保証の問題については徹力である場合が多い。体操競技の愛好家が好意として指導を行うことは、貴重なことであるが、行政側へのアプローチと共に、多方面にわたる組織的な責任や保証が、必要であると考えられる。

さらに、指導者のほとんどが教職の身にあることから、転勤を命ぜられた場合、転勤先には施設・設備もなく専門的に指導をする機会を失ってしまうケースもみられた。また、クラブ員については、中学へ進学することによって、クラブ員の所属する学校との関係で中学体育連盟への登録が認められず、有望な選手であっても自由に試合へ参加できないケースもあることが明らかにされた。

ジュニア選手の育成にあたっては、一貫した指導が望まれるなかで、ジュニア選手が育っていく環境は学校制度、つまり中学・高校という枠にはめられてしまう。また、進学するたびに入学試験が実施されるため、受験準備期には競技の継続が不可能となることで、プランクが生じてくることは、トレーニングの基本原則⁷⁾から大きく逸脱したものになり、一貫性のあるトレーニングを阻害してしまう原因となっている⁸⁾。

部員数が少ないとする現状に対して、単に増えれば良いというのではなく「仕事の都合で週2日が限

度である」、「指導者は常時1名のみで、部員を増やすことができない」、「クラブ員6名に対して、1名の指導者がほしい」等の記載もみられた。このことは、指導スタッフの数に見合うだけの部員数の確保が望まれていることが示唆されている一方、指導者の不足の問題は深刻といえる。専門的知識と指導技術を持った指導者の育成も今後の大きな課題といえる。

一般に児童・生徒の運動能力および体力の低下が言われるなかで、さらに専門的な体操競技を行おうとする者が少なくなったと考えられる。また、小学生を対象にした体操競技を専門とするクラブが各県共に、決して多いとはいえない状況下では、潜在的に高い技能を持った人材の発掘すら難しくしている。各県、各クラブだけにとらわれない底辺の拡充並びに逸材の発掘等にも、今後の大きな課題が残されている。

結 語

体操競技のジュニア育成の発展と技術の向上の足がかりを作りたいと考え、九州県内のジュニア体操クラブに所属するクラブ員と、その保護者および指導者を対象にアンケート調査を試みた。クラブ員の入部動機、練習に対する態度等についてはすでに熊本大学教育学部紀要第39号(1990)において報告をした。

本報では、クラブ員に対する保護者の意識、クラブ代表指導者の抱える問題について検討し、下記のような結果が得られた。

1. 体操の位置づけや期待する試合レベルが高い者ほど、強い達成意欲を見せている。また、そのことに保護者は理解を示し、協力的である。しかし一方では現代の教育事情から学業の両立の困難さを心配事としている。

2. 個々のクラブ員には達成意欲の面で著しい差がみられ、このことから選手の育成と強化の目標を達成するためには、条件の許す限り、話し合いに基づいた技能レベルや意識に応じたグループを編成し、週あたりの練習頻度や練習時間を設定することが望

ましい場合もあるのではないかと考えられた。

3. 指導者のクラブに対する問題点の記載を集計した結果から、部員数が少ないという問題が指摘された。その対策として、各クラブ単位の問題にとどまらず広域にわたる、体操の啓蒙と人材の発掘等の積極的アプローチが必要である。また、進学との関係から、活動を中断せざるを得ない状況や中体連登録が認められず試合に参加できないケースも多いことが明らかにされた。

4. 指導者のほとんどが中学・高～大学の教諭であり、ボランティアで行っている状況である。保護者は、けがを「心配事」としてあげているが、一度傷害が発生すれば指導者の責任や保証は微力である。行政側へのアプローチなどを含めた組織的な補強が必要であると考えられた。さらに、最も重要な課題として専門的知識と指導技術を持った指導者の育成が望まれる。

この要旨の一部は九州体育学会第40回大会(於：熊本市1991)において発表した。

文 献

- 1) 遠藤幸雄：日本体操協会, 体操協会機関誌, 63, 7, (1988)
- 2) 国際オリンピック委員会：ソウルオリンピック組織委員会オフィシャルブック, 266～227, ベースボールマガジン社, (1989)
- 3) 九州体操協会：第4回九州小学生体操競技大会報告書, 1-7, (1989)
- 4) 錦井利臣, 木村正治, 坂下玲子：体操競技のジュニア育成に関する研究, (第1報), 熊本大学教育学部紀要, 39, 29-39, (1990)
- 5) 松尾哲夫：社会体育領域におけるボランティア指導者のドロップアウトに関する研究(第1報), 138, 日本体育学会第39回大会号, (1988)
- 6) 浅見俊雄, 宮下充正, 渡部融：現代体育・スポーツ体系, 3, 96-101, 講談社(1984)
- 7) 猪飼道雄：現代トレーニングの科学, 4-5, 大修館, (1968)
- 8) 佐久間和彦：我国の陸上競技会におけるジュニア選手育成の現状と諸問題, 順天堂大学保健体育紀要, 28, 39-47, (1985)